

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究スタートアップ

研究期間：2008 ～ 2009

課題番号：20810030

研究課題名（和文） エチオピアにおける国家と民族関係再考：統合と分離の狭間

研究課題名（英文） Re-thinking of Tigray under the Ethiopian Empire
: between integration and separation

研究代表者 眞城 百華 (MAKI MOMOKA)

津田塾大学・学芸学部・助教

研究者番号：30459309

研究成果の概要（和文）：

エチオピアのティグライにおいて 1941 年以後の帝国再編の中で中央政府の介入が深まり、ティグライ内の階層分化が深化した点が明らかになった。さらに中央政府とティグライの関係の中でエリトリアの政変の影響が色濃いことも明らかになった。エリトリア統合を狙う中央政府がティグライの行政官配置に介入し、またエリトリア統合のための社会運動をティグライのアドワ、アクスム地域で展開した。ティグライを介してエチオピア政府のエリトリアへの影響力の行使が見られた。

研究成果の概要（英文）

After 1941, the local administration reform led by central government caused the differentiation of social class in Tigray. The series of political change in Eritrea (British military administration, federation with Ethiopian and annexation to Ethiopia) influenced Tigray and the relationship between Tigray and central government. On the other sides, the central government made use of Tigray as the base to integrate Eritrea to Ethiopia through local governor's appointment and social campaign.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1, 110, 000	333, 000	1, 443, 000
2009 年度	1, 180, 000	354, 000	1, 534, 000
年度			
年度			
年度			
総計	2, 229, 000	687, 000	2, 977, 000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：エチオピア研究、エリトリア研究、アフリカ史

1. 研究開始当初の背景

エチオピア史において民族問題が政治問題として取り上げられたのは、1974 年のエチオピア革命前後の時期である。特に問題とされたのは帝政の中核を担った北部のアムハ

ラとティグライによる南部の諸民族支配であった。国内最大民族であるオロモの研究（参考①Donham&Janis,1986）をはじめ、被支配民族から見たエチオピア帝国の民族政策や支配構造に関する研究は帝政研究でも

主流をしめている。日本国内のエチオピア研究でも文化人類学の多大な研究蓄積があるが、研究対象地域はエチオピア南部に集中しており、帝政期の被支配民族を対象としたものがその大半を占める。他方、北部では1962年にエチオピアに併合されたエリトリアにおいて分離主義運動がおこり、その後活動が活発化する中で他民族に影響は及ぼした（参考②Tekeste, 1997 他）。エリトリア分離主義の影響は、アディス・アベバ大学の学生運動に顕著に現れた（参考③Balsvik, 1985）。首都で拡大した学生運動に関する研究は近年深化したが、各民族が居住する地域のローカルな政情分析はまだ議論の余地がある。地方の政情に関する研究が不十分な理由としてエチオピア帝政期の政府資料が閲覧不可能であることが挙げられる。

被支配民族や学生運動に注目して帝政期の民族政策や民族問題の政治化が研究されてきたが、他方で帝政期に支配民族であったアムハラとティグライ両民族に関しては十分な研究がなされていない。19世紀末に現在の版図を築いたエチオピア帝国の中核であった両民族の相違や関係性に関心が高まった契機は、1974年のエチオピア革命直後にティグライで民族解放戦線が成立したことにある。支配民族であるティグライによる反政府勢力結成は国内外の注目を集めた。しかしその後の内戦長期化が影響し、ティグライ民族解放戦線についてYoungによる著作（参考④Young, 1997）があるのみであり、特に戦線結成の背景に関する研究が空白状態にある。

2. 研究の目的

本研究は、エチオピア帝政期における支配民族間の関係をエチオピア北部に居住するティグライ民族とエチオピア中央政府の関係から再考することを目的としている。

3. 研究の方法

1941年から1973年にかけてティグライ民族に対する中央政府の諸政策を史料とオーラルヒストリーに基づき検証する。同時期は、ティグライと隣接するエリトリアと中央政府の関係がエリトリアのエチオピア併合や分離をめぐる徐々に悪化する時期にあたり、その中で中央政府の対ティグライ政策も変容を余儀なくされた時期である。主たる史料は1942年からエリトリアで軍政を行ったイギリスの外交史料・陸軍史料を用いる。同史料の分析によりティグライ内政ならびに中央政府の対ティグライ、対エリトリア政策を明らかにすることができる。他方で中央政府

の中央集権化政策の影響を詳細に分析するために、インフォーマントから当時の情勢について聞き取り調査も行う。オーラルヒストリーを用いることで、国内史料の不足を補い、諸政策の施行による社会変容を分析することも可能となる。

4. 研究成果

本研究では、イタリア撤退後の1941年からエチオピア革命が生じた1974年間のエチオピア帝国政府とティグライ民族の関係の変容を分析する。この分析には、同じくティグライ人が居住するエリトリアにおける1941年以後の一連の政変がティグライ社会、ならびにエリトリア統合を目指すエチオピア帝政のティグライ政策に及ぼした影響を加味する必要がある。

まず、1941年から1974年にかけてのティグライとエチオピア帝国政府の2者関係に注目して、同時期にエチオピア政府がティグライ内政に対する介入を深めた点を整理する。ティグライは、皇帝を輩出するアムハラ民族と並びエチオピア帝国において支配民族とされてきた。1935年のイタリア侵略に先立つ時代にティグライは中央政府に対して一定の自立性を有した。ティグライには19世紀末にヨハネス4世皇帝を輩出したティグライ王朝があり、アムハラ王朝とも姻戚を通じて政治的な紐帯を強めた。中央政府のティグライ内政に対する関与としては州知事の任命があり、これを通じて中央政府の権威を州政治に及ぼしていた。しかしながら州の内政については知事に完全に一任された。

1941年後のティグライ政治では、中央政府の介入が一気に深まる。1942年の州行政改革に始まり、州内政において州知事—長官—首席秘書官の3人を中心に州政府が運営され、さらに州行政が新たに準州—郡—村に再編された。また州議会の設置も義務付けられた。これまで州知事により行政官が任免され、領地や徴税権の付与といった褒章が与えられていたが、1941年以後は行政官に対する現金による給与の支払いが義務付けられた。制度以上にティグライ内政に大きな影響を持ったのが、こうした行政改革を断行するために中央政府からのアムハラ行政官の派遣である。ティグライ州知事にラス・セユムが任命されたが、中央政府は州知事を首都に招聘し、彼の影響を排除してアムハラ行政官によるティグライ内政への介入を深めた。州行政におけるアムハラ行政官が台頭しただけでなく、同時にエチオピア帝国の省庁再編が行われ中央政府管轄の省庁の支局が各州に設置された。1943年にティグライで中央政府に対する「反乱」が生じた後は、1947年

まで国防大臣であったラス・アベベ・アレガイが州知事に代わりその間、「反乱」鎮圧の目的で大量の帝国軍がティグライに流入し、アムハラ行政官とともに力によりティグライの政治勢力や社会からの抵抗を押さえつけて州行政改革が進行した。帝国軍はその後も規模を縮小しつつ再編されてティグライに常駐することになり、軍事においても中央政府の影響力が強化された。

1947年にラス・セユムがティグライ州知事に復帰した後、まったく異なる「近代的」な州政府の体制が構築された。ラス・セユムの息子デジャズマッチ・マンガシャ・セユムとハイレセラシエ皇帝の孫娘が結婚したことでティグライ王朝と皇室の関係は一気に深化した。この後、ティグライではラス・セユムや州行政官に任じられた一部貴族に特権が集中する一方で、これまで武勲により功を認められれば行政官に取り立てられた富農層から行政官への道は閉ざされた。富農出身者が行政官となるには1950年代以後首都の大学で教育を受けざるを得なくなる。1940年代以後のエチオピア政治は、皇室の権威を維持するために一部貴族層を温存しつつ、行政においては近代教育を受けた新しい行政官を積極的に登用した。ティグライ行政にもこの影響が出ていることが明らかになった。その他、税の金納と土地測量も中央政府主導で実施された。この税制改革では、穀物の物納による徴収時のロスや徴税官への貢納といった重い税負担に苦しんでいた農民層には歓迎された。税の金納化にともない州財政の全体像がはじめて把握されることとなり、さらに財務省によるティグライ財政管理も進む。

1941年以後の一連の州行政改革の結果、ティグライで生じたのは貴族と農民の紐帯が中央政府の介入により弱められ、一部権力を維持したティグライ貴族とそれ以外の層の階層分化を進めた。

他方で、ティグライと中央政府の2者関係において生じた中央政府の介入は、エチオピア帝国の他地域と比較すると介入の度合いは浅い。州行政にアムハラ行政官が参入したのは1950年前後までで、いったん中央政府主導の週行政の体制が確立された後、州内政はティグライ人貴族に一任された。40年以前と比べると中央政府の影響は深まったが、その後ティグライの支配層と中央政府の間に対立は見られない。ティグライ貴族が中央政府によりティグライ内で一定の権限を与えられることにより懐柔されたと捉えることもできる。逆にティグライ貴族はティグライ内にとどまらず、エチオピア南部の諸州の行政官に登用され帝国による南部支配の先鋒

としての役割を担わされた。

帝国の介入はありながら他地域と比すると介入の度合いが薄かったティグライで重要になる視点として、ティグライと隣接するエリトリアの政治変容がある。本研究では先に述べた中央政府とティグライの2者関係だけでなく、エリトリアを含めた3者の関係を分析することによりティグライと中央政府の関係が浮き彫りになると考える。エリトリアは、イタリアの植民地支配(1890-1941)、イギリス軍政(1942-51)、エチオピア帝国との連邦制(1952-60)、エチオピア帝国への強制併合(1962)と多様な政変を繰り返している。エチオピア政府は1941年にイタリア支配から解放された直後からエリトリアをエチオピアに統合しようといギリスとの外交交渉を行ったが、イギリスは皇帝の要請を却下し地政学的観点からエリトリアにおいて軍政を開始した。エリトリアではイタリア支配下で禁じられていた政治運動が英軍政下で活発化した。エチオピア政府はエリトリアの政治運動の中でエチオピアとの統合を目指すはとの連携を進めたが、ティグライにおいてもエリトリア統合を促進させるための画策を起こしている。

史料などから明らかになったのは、1、アドワ行政区にエリトリア人行政官配置、2、エリトリア統合キャンペーンをアドワ、アクスムを中心に展開(政府主導の社会運動)の2点である。アドワの行政官となったエリトリア人はイサイアス将軍である。彼は1935年のイタリアによるエチオピア占領の中でエチオピアに入り、イタリア撤退時にエリトリアに戻らずエチオピア帝国において政府と関係を深めた人物である。1943年にティグライ南部で生じた「反乱」時にはティグライ州の州都メケレの軍隊に駐留しており、「反乱」側に拘束された。皇帝は親エチオピア派のイサイアス将軍をエリトリアに近接するアドワの行政官にすることで、エリトリア・ティグライ双方に影響力を行使しようとしたと見られる。エチオピア政府資料の公開が進んでおらず、エチオピア政府がイサイアス将軍を登用した経緯や目的を詳細に明らかにできず、さらに今後この点を研究する必要がある。

エリトリア統合キャンペーンについては、アドワ、アクスム周辺で大規模な聞き取り調査を実施した。インフォーマントの高齢化、現在のエチオピア・エリトリア関係悪化という制約の中でもキャンペーンが中央政府主導で行われ、キャンペーンの最後には皇帝がアドワ・アクスムを訪問したことが明らかに

なった。政府資料により、アセファ・ウォセン皇太子を中心に中央政府でエリトリア統合協会が結成されていたことも明らかになった。実際のキャンペーンが国境を目前にするティグライで開かれたことは興味深い。キャンペーンに参加したアドワ、アクスムの住民の中には1935-41年のイタリア支配期にエリトリアに移動したものも多く含まれており、政府はティグライ民族の連帯をエリトリア統合キャンペーンに利用したものと考えられる。

この2点からは政府主導でエリトリア統合に利用されるティグライ像が浮かぶが、ティグライ人はイタリア支配下からエリトリアとエチオピア間の移動を繰り返している。経済的先進地であるエリトリアで経済活動を行う人々が増加した。英軍政下でいったん人の移動が制限されるが、エリトリアにおける連邦制の移行、エチオピアへの強制併合によりエリトリアとティグライのひとともの移動は飛躍的に拡大した。ティグライ人がエリトリアにおいてエリトリア人の経済的既得権益を脅かすことは不可能であったが、エリトリアにおける政治運動の影響をティグライの農民、商人が受けた可能性はおおいにある。政府資料からエリトリアの政治運動とかかわったティグライ人については触れられておらず、今後聞き取り調査を含めて研究する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

眞城百華、「エチオピアの民衆反乱に対するイギリス軍の空爆」、季刊戦争責任研究、第63号、pp. 20-28、2009年・査読なし

Momoka Maki, “The Wayyane in Tigray and the reconstruction of the Ethiopian government in the 1940’s”, in Svein Ege, Harald Aspen, Birhanu Teferra and Shiferaw Bekele ed, *Proceedings of the 16th International Conference of Ethiopian Studies*, Trondheim, 2009, pp. 655-663. 査読なし

[学会発表] (計1件)

Momoka MAKI, “Ethiopia and the Second World War: Italian invasion, Liberation and Reconstruction of the Empire”, the first Congress of the Asian Association of World Historians, Osaka, 30th May 2009

[その他]
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

眞城 百華 (MAKI MOMOKA)
津田塾大学・学芸学部・助教
研究者番号：30459309